

デーンロー地域内の社会的不均質性について

— 言語史的立場からの考察 —

横 田 由 美

はじめに

1. デーンロー地域とは
 2. 北部地域の独自性
 3. キリスト教への改宗
 4. 融合の度合い、人数と定住実態、文化的水準
- おわりに

はじめに

イングランド王のアルフレッドとデーン人ヴァイキングの指揮官グットルムの間で886年に締結されたエドモア協定によって、デーン人はイングランドの北部の広い地域に居住する権利を公に認められた。それ以来その地域は、デーンロー地域と呼ばれ、先住民であるイングランド人と北欧人の言葉、文化、社会システムの融合によって独特の社会が誕生していった。そして、その地域は北欧人の存在しないイングランド南部の人たちの目には非常に奇異に映ったため、様々な事象が比較対象となり、その結果、北対南の比較において、デーンロー地域全体が北欧の色合いの濃い均質な社会であり、かつまとまった共同体であるかのような扱いを受けていることがしばしばである。しかし、その地では社会の至る所で北欧的なものの存在が優勢であったことは否めない事実であるが、決して均質な社会ではなかったのである。英語における言語変化の過程と結果を考えていく際にこの不均質性を明確にしていくことは、英語史研究の上で重要である。よって、本論では、デーンロー地域の社会的不均質性を、中世以前の英語を考慮する際に非常に重要であると思われる項目から明らかにして行くことが目的である。まずは、セクション1ではデーンロー地域の範囲を再確認し行政や農地の単位を概観し、セクション2ではその地域内における北部地域の独自性、セクション3ではキリスト教への改信の度合いの地域差、セクション4では北欧語の英語への影響を測るための試金石になっている北欧人とイングランド人との融合の度合い、北欧人定住者の人数と定住実態、両者の文化的水準について述べる。

1. デーンロー地域とは

デーンロー (Danelaw) はその名前からして分かるように「デーン人の法律」を意味し、ヴァイキングとしてやってきたデーン人が自国のデンマークより持ち込んだ法律で、それが施行されていた地域をデーンロー地域という。それは図1にあるようにかなりの広範囲で、ノーサンブリア、五城都市 (リンカーン、スタッフォード、ノッティンガム、ダービ

一、レスター)、イースト・アングリア、といった北欧人が大量に移住し、ヴァイキングの軍事要砦があったり、北欧人が幾度となく王として君臨したりした、北欧気質が強い地域のみならず、南東地域内陸部のノーサンプトン、ハンティントンシャー、ケンブリッジシャー、ベドフォードシャー、ハートフォードシャー、バッキンガムシャー、ミドルセックス、エセックスも含まれていた。

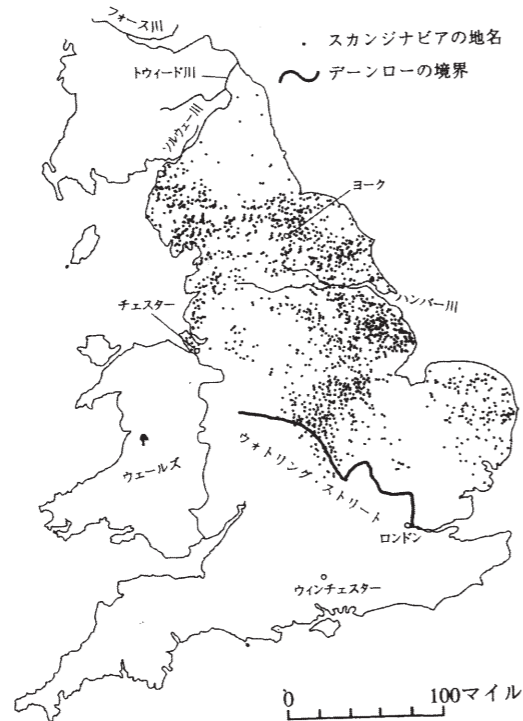


図1 デーンロー地域の南部境界線¹⁾

デーンロー地域の南の境界線はアルフレッド大王とデーン人指揮官グットルムの間で886年に締結されたエドモア協定によって定められ、大まかにロンドンから北西に延びてチェシャー辺りまでつながっているのだが、このようになりにかなり分かりやすい南の境界線とは異なり北の境界線ははっきりとは決められず、曖昧であったようである。スコットランドに向かうイングランドの極北地域には当時は住民があまりいなかったので明確に決める必要性がなかったのであろう。ある書物には北部の限界はヨークシャーとダラムを越えてタイン川までとしている一方で、そのタイン川のあるノーサンバーランドは13世紀の資料ではデーンロー地域に含まれていなかったらしい²⁾。しかし、ランカシャー、カンバーランド、ウエストモアランドのある場所にはそれぞれデーンロー地域であることを意味する石碑などの印があることから、その地域はデーンロー地域に含まれていたと考えてもよいかもしれない³⁾。

デーンロー地域以外の地域、つまり、イングランド人が居住した南部地域と西部地域にはそれぞれウェセックス法とマーシア法があったが、その2つはたいした違いがなかった

のでその地域の社会的なシステムは実質的には同一のものであったと考えられる。それに対してデーンローは明らかに異質であり、その違いはその地域が政治的に存続した約50年の間だけがそうであったわけではなく、10世紀にその地域がイングランド王の統治下に入って暫くしてもその地の異質性は歴然としていたし、11世紀初期にイングランド全土を統一したクヌート王でさえもその違いをはっきりと認識していたことは、彼の時代にデーンローという呼び名が始めて使われたことから分かる。また、1066年以降ノルマンディー公国のウイリアム王の命を受けてやって来たノルマン人の法律家の目にも明らかであった⁴⁾のは当然のことである。デーンロー地域がイングランドの統治下にあっても異質な存在であったのは、イングランドの王たちがその地域を奪回した後も、その地方の法律上の慣習にほとんど首を突っ込まずそのままにしておいたからである。そのように放置しておくことが可能だったのは、イングランド王とはつまりウェセックスの王であったから、デーン人たちにそれまでどおり東北部の土地を所有させておいても、失うものも得るものなかったからかもしれない⁵⁾。あるいは、デーンロー内には著しく人口密度が高く、都市化も顕著に進んでいた地域があったので、政治的な介入をしないほうが国益につながると考えたためかもしれない。

ではデーンロー、つまりデーン人の法律自体いかなるものであったのか。ここではそれが反映されている簡単な用語説明のみに留める。まずは土地区分に関して述べると、ヨークシャーはかつて北欧由来の三分した行政区画であるリディングに分けられていた⁶⁾。このリディング (*riding*) は古英語の *thriding* 由来のものだが、それ自体は北欧人の言葉であるノルド語の「3つの部分」を意味する *þriðjungur* から借用された語である。ヨークシャーでは東西北の部分それぞれ *East Thriding*、*West Thriding*、*North Thriding* と呼んでいたが、*Thriding* の語頭の *th* が前の語の末字 *t* ないし *th* と見なされた結果、それが本来の語形からなくなり、それぞれが *East Riding*、*West Riding*、*North Riding* と言われるようになってしまったのである。そこから現代ではリディング (*riding*) になったのである。ちなみにこの現象を言語学では異分析 (*metanalysis*) という。1974年の行政区画改正によってリディングという語は実質的には廃止されたにもかかわらず、現在でもなおそれ以前のように北、東、西の三区に分けられた名称は廃れることなく、一般的な呼び方として今でも続いている。

行政単位については、ヨークシャーと、五城都市を中心に建てられた州は、イングランド式の百人の兵士か、百の鋤一本で耕せる面積の土地⁷⁾ のような百の何かを単位にしたハンドレッド (*hundred*) ではなく、ワーペンテイク (*wapentake*) に区別されていた。それはノルド語の *vápnatak* ('*weapon-taking*' 「武器を手取る」) という意味である。それぞれのワーペンテイクごとにシング (*thing* <ノルド語 *þing* 「集会」) と呼ばれる議会が開かれていたが、そこにおいて武装して集まる者たちが、所持した楯を叩いたり弓矢をガラガラ鳴らしたりして賛成の意を意味する動作自体が行政の単位を表すものになっていったようである。しかしその語はデーンロー地域特有のもので、北欧の国々の行政上の単位ではない⁸⁾。ちなみに、デンマークではヘレッズと呼ばれる単位に区別されており、そのヘレッズがひとつの農耕や軍事の共同体をなしていて、それごとにシングが行われたのである。

ワーペンテイクで開かれるシングで、最もイングランド人の目を引いたのは、12人の陪審員が無実の者をとがめたり、犯罪者をかばったりしないことを、聖遺物に宣誓しなければならなかったことではなかろうか。何故なら、このような宣誓する陪審員はイングリ

ドの法律では存在しなかったからである。そして現在のイングランドやアメリカなどで一般的になっているこの行為はデーンロー地域にその起源があると考えられている⁹⁾。そのような行為のみならず、デーンロー地域での北欧のものを土台にした法や法的慣習はイングランド全土の法律家によってかなりよく知られており、専門用語の一例を挙げると、*lahslit*「法律違反」、*lahcop*「法の購買」、*sammæle*「契約」、*botleas*「償われることのできない」、*festerman*「保証人、担保」、*sacleas*「無罪の人」などのようなノルド語起源語は、語が存在しただけではなくて、そのような語が持つ概念もがイングランドの法律とは明らかに異なっていたことを如実に物語っている。歴史学者のジョーンズは「一般的に北欧人にとって、法の尊重、シングでの公で民主的な法の牽制、全自由民に対する合法性は、（途中省略）ヴァイキング時代を通して、彼らの文化が（イングランドのものとは）異なっていることを表す特徴のひとつであって、それは個々の男と女に置かれた価値と、彼らの思想の啓蒙的な実用主義哲学を雄弁に語っている¹⁰⁾」と述べている。

デーンローの大きな特徴は以上述べたワーベンテイクで行われるシングでの法律に関する審議内容やそこでの行為であるが、それ以外のものについて触れておくと、農業共同体は、肥沃な五城都市においては、一般にイングランド式の一家族を養うに足りるとされたハイド (*hide*) (約60から120エーカー)ではなく、一年間に鋤一本で耕地できる地積プラウランド (*ploughland*) (約120エーカー)に分けられ、それは更に8つのオックス・ギャング (*oxgangs*) 一年間八頭の牛を使って耕す団体の土地の単位一に区切られた。また、1086年に製作された土地台帳に記載されている身分階級にもノルド語が用いられており、自由土地保有者のホールド (*hold*<ノルド語*höldr*)、身分の高い土地保有者、つまり領主に対して兵役以外の農役の義務を負担する土地保有百姓のソークマン (*sokeman*<ノルド語*sókn+man*)、そして自分の土地を持っていない百姓よりも少し位の高いドレング (*dreng*<ノルド語*drengr*)、そして最下位の奴隷や農奴のボンド (*bonde*<ノルド語*bōndi*) とスロール (*thrall*<ノルド語*þræl*)があった。

しかし、このような法律、慣習、またそれを表現する用語は、すべてのデーンロー地域に均一なレベルで隔々まで流布していたわけではなく、その地域の現住民と北欧人の混交具合の状況、北欧人集中定住地域やそうでない地域、政治的忠誠度や社会システムなどによってばらつきがあった。別の言い方をすると、デーンロー地域はひとつの法律システムを基盤にした統一された地帯ではなく、個々の地域がそれぞれの組織的な特色をもった集合体であったと言える。そうであっても、それはその地域以外の人からみると明らかに差異であって、多分に北欧色の強いものであったことは言うまでもない。同じデーンロー地域でも、北欧人の王が続き、断続的に多く入植者を受け入れたノーサンブリア、そしてヴァイキング時代に軍事要砦がありその後もその要砦跡を基盤に入植者を受け入れた五城都市とその近辺、その2地域に比べて北欧人の割合が比較的少なく地理的にウェセックスと貿易都市ロンドンに近いイースト・アングリア、そしてその内陸部では状況がかなり異なっていたであろう。北欧色の強弱について、歴史的事実と言語的事実（北欧起源の借用語の残存、地名、人名の地理的分布を判断基準にした）を考慮して端的に述べるならば、一般にデーンロー地域の北へ行けば行くほど、北欧人の影響が深く強く浸透していたのである。

2. 北部地域の独自性

北欧人の影響が最も深くかつ強かったのは、ハンバー川以北に位置するノーサンブリアであったことは疑いもない。それは歴史的事実と言語的事実に関する事以外に、ハンバー川以南と比べた時のイングランド王への忠誠心の温度差にあらわれている。ハンバー川以南のデーンロー地域はイングランド王に920年に降伏しているが、これはその地の住民—イングランド人、イングランド化したデーン人、または混血人—の自主的な降伏であったらしい¹¹⁾。イングランド王の統治下に戻っても土地所有に関して基本的な変化はなく、イングランド人だろうとデーン人であろうと関係なく今まで通りに自分たちの土地を保持することができたことが要因のひとつであろうと考えられる。その上、この地域の北欧人は早くからキリスト教徒になっていたことも何らかの関係があるかもしれない。それとは反対にハンバー川以北は、954年にイングランド王の統治下に再度戻っても、イングランド王に忠誠心を示すことに関しての住民の感情は複雑であったようである。

ヨークを都とするノーサンブリアは長い間、ほとんどの時期を北欧出身の王たちによって代わる代わる統治されていたので、際立った特徴をもった別個の国のようであった。イングランド人、デーン人、その混血、ノルウェー人、アイルランド系ノルウェー人他などで構成される住民が、イングランドの統治国家の仲間入りをすることに肯定的でなかったのは、北欧的気質をもった多くの住民が、南部のイングランド人に嫌悪を抱いていたからと言うよりも、地方のウェセックスに対する嫉妬心と、地方が独立しているという地方的感情のためであったと考えられる¹²⁾。だから早い時期からひとつの独立国家としての強い意識がもともとのノーサンブリアのイングランド人、つまりそれはアングル族のことであるが、に存在していたところに、ヴァイキングに端を発して北欧人が大量に移住してくることを通して、ヨークとダブリンをむすぶ一大貿易ルートの確立などの商業的成功などが、その地における北欧人の王たちの気力を奮い立たせことも相まって、地元の人たちはウェセックスを中心にしたイングランド社会とは異なったノーサンブリアの独自性の意識とアイデンティティーの創造を後押ししたと考えられなくはなからうか。そのような状況のために結果的にイングランド人であるヨーク大司教のウルフスタンでさえもウェセックスに対抗する北欧人の王の肩をもったのである¹³⁾。954年にヨークにいた北欧人のノーサンブリア王のエリック血斧王が退位させられて、イングランドの王がその地を再び手中に収めることで、多くの北欧人が政治の中枢を牛耳っていたノーサンブリアは表向きには消滅することになる。しかし依然としてその地はイングランド全体の安全に脅威となる存在であったことは間違いない¹⁴⁾。ノーサンブリアの州太守たちは、1066年のノルマン・コンクエスト後でさえも、イングランド征服を企て大陸からやってきた新たなヴァイキングと同盟を結んで幾度となく叛旗を翻したため、それを駆逐するためにウイリアム王は「北への襲撃」(*Harrying of the North*)として知られる残忍な報復行動をとったのであった。彼は緻密な計画を立てそれを実行することで火と破壊をもってヨークシャーの大部分を荒廃させ、その地の住民を追い払うことによってその地での更なる謀反を防止したのであったが、その行為はそこだけに留まらず、マーシアまでも波及するほどの大規模なものであった。その恐ろしい攻撃から逃れるために何百人もの北部の住民はスコットランド低地のロジアン地方へ逃亡したのであった¹⁵⁾。そのために、今日のスコットランドの低地の言葉に、ノーサンブリア地域の古英語や北欧起源語を見出すことが出来るのである。

北部の北欧色の強さについて、それ以外の地域に住んでいるものから批判的な声があったのも当然のことであろう。例えば、『アングロ・サクソン年代記』の959年の記述には、エドガー王がデーン人の慣習をその地に深く広め、そして北欧人をその地に招いたとして非難しているし¹⁶⁾、唯一現存する古英語期の個人の書簡¹⁷⁾には、イングランドの慣習をやめて異教徒のやり方に追随するのは恥知らずであるとした上で、当時の流行りの髪型にも言及し、後頭部を剃り上げ目に掛るくらい前髪をたらずデーン人の髪型をまねるのは恥ずべきであると記されている¹⁸⁾。このような批判的見解はキリスト教の教えを司ったり、その普及に携わったりしていた者たちのものであって、実際に北部地域に住んでいた、宗教家でもなければ政治の中樞を担うことのない、一般の住民は、北欧人の習慣などに追随しているという意識などないまま、ある意味無意識に、あるいは自然にそうやって行ったのであろう。それが顕著に現われていたのが服装であったかもしれない。というのも、興味深いことは、ノーサンブリアにいる住民のほとんどが、遅くとも1084年までには、北欧風の服装を採り入れたようで、同年にデーン人がその地に攻め寄せた時に、住民を友人であると勘違いさせないために、いつもと違った服装をするようにと命令が下されたのである¹⁹⁾。

3. キリスト教への改宗

デーンロー地域内における南北の北欧色の違いはキリスト教の普及速度にも表れている。ヴァイキング時代後期の北欧では、キリスト教が徐々に広がりを見せてはいたといえども、ほとんどの人々はまだゲルマン民族古来の神々である主神オージン（Odin）、雷神ソール（Thor）、軍神チュール（Tyr）、繁栄の女神フレイヤ（Freyja）といった土着の神々を崇拝していた。一方アングロ・サクソン人も、イングランド入植当時は、それと同じようなゲルマン民族共通の古来の神々を信仰しており、アングロ・サクソン社会での主神ウォーダン、あるいはウォーデン（Woden）は、北欧神話のオージンに相当する²⁰⁾。しかし、597年にローマから来た聖オーガスティンがイングランドに上陸し布教活動を始めると100年もたたない内に、キリスト教が国内全土に普及したのである。だから、ヴァイキングが到来した時には人々は熱心なキリスト教信者となっていた。そしてヴァイキングもイングランドへ定住するや否や、キリスト教に改宗したようであるが、その改宗の度合いも地域差がかなりあったのである。イースト・アングリアでは、早くも、多くのデーン人が9世紀の終わりまでには改宗し、10世紀前半までには教会への敬虔と熱心さにおいて、ヨーロッパの他の地域には全く遅れは取っていない状態であったようである。その地に近いオックスフォードで、デーン人を毛嫌いしていた当時の王がイングランド全土にいるデーン人の大量虐殺を命じた「セント・ブライスの日の殺戮」（Massacre of Saint Brice's Day）の際に救いを求めて教会に駆けこんだデーン人がいたことからデーンロー地域南部における信仰の深さは読みとることができる。一方、ノーサンブリアでは、11世紀初期であっても、人々がなかなか自主的に改宗しなかったため、ヨーク大司教ウルフスタンが北欧古来の神々の信仰を止めさせる法律を立案することの必要性を説き²¹⁾、法律によって宗教を定めなければならなかったほどであった。

北欧人が改宗した理由はイングランドに移住した時期と場所によってさまざまであったであろう。もちろん、新天地でどのような心情の変化がおきたのかは分からないが、英語

の関連書物には、北欧土着の神々を信仰していた北欧人が、キリスト教国のイングランドに暮らし、次第にキリスト教に改宗したのは、やはりキリスト教がより高い倫理性をもっていたからだろうなどということがしばしば書いてある。そのような者もいたであろうが、それだけが、全ての時代と全ての場所に通じて、唯一の理由と考えるのは、あまりにも偏った見解だといわざるを得ない。何故なら改宗しても高い倫理性をもって行動していない者が存在しているからである。アルフレッド大王がデーン人の指揮官グットルムとその家臣たちにキリスト教に改宗するように命じたのは、国を分断してしまう恐れのある分子を少しでも緩和させ、国全体を統一したひとつの宗教で統治するといった政治的考慮からなされたであろうが、彼は改宗してからも依然として謀反を起こしウェセックスに攻撃を仕掛けているのである。また、ノルウェー人ヴァイキングのオラフ・トリュグヴァソンなどはヴァイキングとしてイングランドに上陸したときはもうすでにキリスト教徒であり、その後ノルウェーに戻って王の座に就き（994年－1000年在位）キリスト教を広めるが、そうしたのは、競争者を排除し中央集権を自らの利益のためによりよく実現するために新しい信仰を楯にとった政治的な行動であって²²⁾、そのために彼がとった方法というのは非常に力づくで残忍なものであったことをさまざまな中世北欧の物語であるサガが証言している。

改宗してもグットルムやオラフのように騒動を起こした者も確かに存在したが、この2人のように高い地位にある者がこのような運命を辿るのは、ある意味、自然の成り行きであったかもしれない。しかし、このような立場になかった、大多数の北欧人移住者はどうであっただろうか。イングランド人が多く住んでいる地域では、改宗し宗教上の兄弟になるほうがより大きな富を手にするチャンスであったかもしれない。また、後のアイスランドで見られるように、伝道者の剛勇や、法衣や儀式の美々しさに対する賛美に圧倒されて、そうしたものもいたかもしれない²³⁾。しかし、多くの北欧人はイングランド人と共存する過程において、自分の意思でそれに救いを求めようと、自主的に改宗した人もいたはずで、救いを求めなければならなくなるような北欧人の心理や精神構造の僅かな部分は、北欧の宗教観自体とその宗教と人間の関係から読み取れるかもしれない。

まずは北欧の宗教観についてであるが、北欧人は代々にわたり、異教徒的終末観を抱いてきたといわれている。北欧ではその終末観が心の底にあった900年代終わりに、タイミングよく登場してきたのがキリスト教であった。伝道者たちはキリスト教的「世の終わり」が近づいてきていることを説き、キリスト再臨と復活を予言し、またそれを利用することで、多くの人がキリスト教を受け入れやすい心的状況を作り出したと考えられる²⁴⁾。故国でのそのような状況は、イングランドに定住した北欧人たちにも当てはまることであったかもしれない。もしそうだとすると、キリスト教をイングランドの地で目の当たりにし、教義に賛同し、救いを求めて改宗に踏み切ったものもいるであろう。彼らが改宗したもうひとつの理由は、北欧独特の世界観を基礎にした土着の宗教と人間との関係にあるかもしれない。中世の世界観において、キリスト教が広がる前のヨーロッパの人々は2つの宇宙で生きており、ひとつは自然界の諸力を人間がなんとか制御することのできる範囲の小宇宙で、もうひとつはその外側に広がっていた人間がとてでもないけれど制御することのできない霊、巨人、小人、死などが支配する大宇宙であり、この両宇宙は排他的なものではなく、同心円のひとつの宇宙を形成していた²⁵⁾。小宇宙とは北欧人の意識の中では人間の

住むミッドガルド (Midgard) で、これは人間によって開墾され開発された世界の部分であって、その垣根の外側には人間の手が加えられていない混沌状態の世界、つまり手のつけられていない自然が広がっているのである。この世界は北欧神話でいう巨人が住むウトガルド (Utgard) のことである。このような世界観を自国でもっていた北欧人がイングランドに移住後には、この両世界を保持することは物理的に、また精神的に難しくなったのではなかろうか。

まずは小宇宙を形成している人間社会の共同体の変化が挙げられる。ゲルマン人共通の古来土着宗教は多神教で、日本の八百万の神にある意味似て、確固とした中心的な組織がなく、汎神信仰的な性質であった。北欧では、宗教的・法律的な儀式は部族や氏族が中心的な役割を果たしていたが、イングランド移住に伴い、本来は強く結ばれていた部族間の結合が弱くなり、以前のように機能しなくなったので北欧人の精神を強く捕えるものではなかったのである。また大宇宙については、人間の手によって制御されない自然の世界一つつまりそれは法の外側にある海を示している一をヴァイキングたちは、船舶の知識と技術と共に克服し、自国の法律外の土地で襲撃・略奪行為を行い、その地を征服さえもしたのである。そのような体験が古い宗教における大宇宙が存在するという意識を低下させていったのではなかろうか。

その二世界が徐々に失われていく方向であったところに、タイミングよく彼らの目の前に存在していたのがキリスト教であった。よって、森の霊や死者の軍勢を信じ、生きつづける死者の存在を信じ、さまざまな迷信の世界に生きていた北欧にいる北欧人に比べて、北欧人移住者は、新天地での新たな社会状況やそこに至るまでの経験によって、キリスト教の神を受け入れやすい精神状態にあり、またそうすることが彼らにとっては合理的であったかもしれない。

ヴァイキングの改宗を述べるとき、デーンロー地域だけの問題ではなく、北欧全体に関することでよく話題になることは、北欧人の改宗はヴァイキング時代終焉となんらかの関係があるかどうかということである。もっと砕いて言うと、北欧にキリスト教が広まったことはヴァイキング時代が終焉した直接の原因であるか、ということである。ヴァイキング時代は11世紀の初めになると急速に終わりを告げる。それまで、優れた船舶技術を駆使して世界の至る所に渡り襲撃しあるいは定住したヴァイキングが、急に熱からさめたようにその活動を放棄してしまったのは、キリスト教徒になることで、野蛮な異教徒的精神を棄て、穏和な民族に変わってしまったからだという見方もある。しかしこの考えに否定的な考えの者もいるようである。いずれにしろ、ヴァイキング時代が終わるのは、ヨーロッパにおける中世が誕生する時期であるので、その過渡期にあるヨーロッパの全体的な変革を考慮しなければならないため、今はあまり深くは立ち入らないのが得策であろう。

4. 融合の度合い、人数と定住実態、文化的水準

デーンロー地域と一言でいっても、法律や慣習、イングランド王への忠誠心、そしてキリスト教の普及率においてまったく均一ではなかったことは既に述べた。それらのことに関連することで、場合によってはそれを説明することになるかもしれない事項で、ノルド語の英語への影響を考える際によく話題になることは、デーンロー地域での(1)北欧人とイングランド人との融合の度合い、(2)北欧人定住者の人数と定住の実態、そして

(3) 両者の内でどちらの文化的水準が高かったか、である。そして必ずと言っていいほど、言語研究の立場上、英語に相当数の北欧語起源の語、それも閉ざされた体系 (closed class words) である機能語、そして日常語が多く取り込まれているという観点から論議が進み、ほとんどの場合、こんなに沢山の北欧起源語があるということは、イングランド人と北欧人は友好的に混ざりあった結果であって、それには非常に多くの北欧人がいたに違いないし、双方の文化水準は同一でないにしても似かよっていたという風に推論が流れていくのである。このような考えは、大筋では誤りでないかもしれないが、複雑な状況をかなり単純化していることには間違いない。

まず始めに、両者間の融合の度合いはどうであったかについてであるが、それについては両者の共同生活が平和的であったか否かと関連している。一般にデーン人が武器を捨て農業中心の自給自足の生活をするようになると、新天地での生活に順応すべく平和的な暮らしをし、土地の人と友好的な関係を築いたとされている。そのような者が実際存在したことは確かであろうが、いったん定住し農耕生活を始めた者であっても、再び武器を取って、新たにやって来たヴァイキング側につきイングランド軍と戦った者がいるし、反対にイングランド軍側についてヴァイキングと戦った者もいる。また、状況の有利な方にすぐに寝返えたりもしたようであり、そのような者の中にはヴァイキング兵士として来たものでイングランドに居座り、戦うことのみを専門にしたプロの傭兵も存在したことであろう。どちらの側について戦闘に加わるかに関して非常に重要なことは、その当時ほとんどの人は自分がある国家の一員であるという認識があまりなかったことで、忠誠心を誓うのは国ではなくて、主として個人であったということである²⁶⁾。だから、北部と東部を舞台にした戦闘時には、地元のイングランド人がデーン軍にかなりたくさん含まれていたのは明らかである。その他、デーン軍に加わったものの中には、当時奴隷の身分であった先住民族のケルト人、異なったイングランドの王国間の戦闘で捕らわれの身になったイングランド人、飢饉による生活苦で親族に奴隷として身売りされた子供たちがいたし、また犯罪への罰金を払うことができず奴隷になったものが、脱走しデーン軍に入隊したりもした²⁷⁾。このようなものがデーン側についた時には、昔の主人が治めていた区域を襲撃することが怨恨を晴らす絶好の機会だと思ったかもしれない²⁸⁾。対照的に、南部と西部を拠点としたイングランド軍にデーン人がいたかどうかは定かではないが、もしいなかったとすれば、単にその地域にはデーン人があまりいなかったからというだけのことであり²⁹⁾。同じような戦いの繰り返しが、ヴァイキング時代以前のイングランドにおいてあったことも留意しておくといえよう。ヴァイキングの到来するまえには、イングランド人同士間で常に激しい戦いがあり、デーン人がもしやって来なかったら、その争いはもっとあったと考えられる³⁰⁾。そして、その自国民同士の戦いにおいてイングランド人は、デーン人と同じように、自分の有利な側に寝返ることがあったのだ。そのためにデーン人の同じような行動に格別に驚くことはなかったようである³¹⁾。以上のように考えると両者間の融合は平和的だったと簡単に片付けてしまうよりも、平和的な時期や地域もあればそうでもない時期や地域もあったであろうし、その状態は地域の社会状況によっても大いに異なっていたのである。そして、安泰時よりも、外来人や国内の様々な人たちがデーンロー地域に集結した戦争状態の時には、様々な方言 (そして言語) を話す人たちの接触を急速に引き起こしたであろう。そしてそのことは言語変化を考える上で非常に重要なことである。

平和的共存か敵対的関係かの次によく話題になるのが、何人くらいの北欧人が移住し、そしてその際に、女性や子供などを含む家族単位であったか、また定住の実態はどうであったかである。イングランドに入植した北欧人の数を考える場合に注意しておかなければならないことは、その総数を概算でも推測することは不可能であるということである。初期のヴァイキング兵士が武器を捨てて定住するようになると、そのものたちを頼って第二次的な移民が北海を渡ってやって来たが、その事自体は地名の研究で明らかにされているだけで、それ以外のこと、つまりその規模などについて記録は何もない。そのように地名に残されていないものの、ヴァイキング時代の約200年間には、断続的に大陸からの流入があったろうと考えられている。このような状況を更に難しくしているのが、渡英してきた者全てが永遠にイングランドの地に定着したとは限らないということである。居住し各地で支配権を握っていても、有力な統率者を失ったり、状況の変化によったりして、その地に留まれなくなった場合、諸事情で故国に引き揚げることもできなくなり、アイスランドに移住することになった場合があったからである³²⁾。そのような流動的な社会情勢下では、ある程度の人数どころか、おおまかな北欧人移住者の規模をつかむことさえ不可能なのである。

そうであっても、その昔、言語学者や歴史学者のあいだで、何人位の北欧人が存在していたかについて、白熱した議論がかわされ、何をもとに推論をするかによって、その答えはさまざまであった。言語学者の場合の判断基準はだいたい北欧起源語の数であって、それが英語に非常に多く残っているということは相当な数の北欧人がいたに違いないとしている。しかし、その場合の「相当な数」とは一体どれ位なのかを数値を示している者はあまりおらず、非常に曖昧な表現であると言わざるを得ない。それ以外に、その推論が言語学的に誤りである点は、あるひとつの言語が別の言語に影響を与える場合、影響を与える言語の話者の数はあまり関係なく、その話者がいくら少数であっても社会的な状況次第では、多大な影響を及ぼすことがあるのである。よって、言語の影響の度合いとその言語の話者の数は比例する必要性は全くないのである。

歴史学者は、イングランドに入植した北欧人の総数は分からないにしても、初期のヴァイキング兵士の人数を船の大きさ等をもとにして推測している。ちなみに一応の目安として述べておくと、もともとの「偉大なる軍隊 (*se micel here*)」と呼ばれる軍隊に属していた兵士の総数は、推定で何百人³³⁾、あるいは何千人³⁴⁾と言われているが、実際のところはふたつの数値の間のどこかにあるであろうとされている。その間の数値を多いと見るか少ないと見るかは人それぞれであろう³⁵⁾。

ヴァイキングが自国から自らの妻を伴って来たかどうかは定かではない。女性がヴァイキング船に乗っていた記録は『アングロ・サクソン年代記』やその他の年代記にはない。彼らの掟によると、ヴァイキング活動は男性限定の行為と決まっているので、早期のヴァイキング船に女性が乗っていたとしたら、捕虜として強奪されたものと考えerほうがよいであろう。しかし、彼らがヴァイキングとしての活動を放棄し、定住するようになると、貿易用のヴァイキング船などを使って、祖国から妻子を呼び寄せたかもしれない。また、第二次的な移民としてやってきたものは、家族単位でそのような船に乗り北海を渡り、入植したものもいたであろう。対照的に、定住した若いヴァイキング兵の中には定住地のイングランド人女性と結婚した者もいたはずである。そう考えると、12世紀の記録に北欧系

の女性の名前がデーンローの北部地域に出ているからと言って、北欧から女性が実際に渡って来た根拠とすることはできない³⁶⁾。その上、イングランド人の中で北欧系の名前が流行した時期があるので、それを考えるとその頃の北欧系の女性の名前のすべてが北欧出身者の者であるとは限らないのである。

デーン人の多くは広大なデーンロー地域に住みついたが、北西部の割と限られた地域に入植したのはノルウェー人であった。デーン人の場合と同じく、彼らの定住の実態、融和の具合、数は明確に分かっていない。しかし、この二者の定住のパターンを比較することで興味深い違いが見えてくる。デーン人起源の地名は *-by*、*-thorpe*、*-toft* のような地名要素が含まれることが特徴的であるが、その地名は古英語起源の地名の間に散らばっていることから、デーン人とイングランド人の生活様式にあまり違いがなかったことを示していると言えよう。そしてデーン人は戦いや平和的な共同生活を通して、ゆっくりと地元の住民と混ざりあい、農耕作業なども協力して行ったであろうと考えられている。そのことを最も強く暗示しているのは、彼らの村落の形状が現地の住人のものと非常によく似ており、大抵の場合、農地の全てが、小村、草地、農耕に適した放牧地、荒野の中に密集して、その全てがひとつのまとまった塊になっていたのである³⁷⁾。

それと対照的なのがノルウェー人たちの村落の特徴である。彼らが多く住んだ地域は *-scale*、*-gill*、*-fell*、*-slack*、*-thwait* のような地名要素が含まれた地名で表されていて、そのような地名が付いている地域は、たいてい農地が丘陵の斜面や荒野の外辺に沿って広がっていて、村が一束にまとまっておらず、広く散らばった共同体であった³⁸⁾。彼らの定住地は、かなり広範囲なデーン人のものに比べ小規模で、北西部のみに集中している上、住み着いた丘原や谷は小刻みで隔離されているため、独立している傾向があり、カンバーランドとウエストモアランドの深い渓谷における地名の構造の多くは、彼らがほとんど、あるいは一切、現地人であるイングランド人に出くわさなかったことを示唆している³⁹⁾。このように人里離れたところに入植したノルウェー人は当然のことながら現地人と接する機会がほとんどなかったため、現地の人との融合はデーンロー地域のようにはいかず、極端にゆっくりとした速度であった。よって彼らの話し言葉も現地の人のものと混ざり合うには相当な時間がかかったため、この地方では北欧語が長く生き残ったと考えられている。

つぎに、イングランド人と北欧人の文化のレベルの優劣はどうだったのかということだが、北欧人移住者の文化レベルはイングランド人のものよりも高かったはずはないであろう、というのがほとんどの英国の学者の見解である。道路や導水橋を建設したローマ人や、城や永続する軍事要砦を作ったノルマン人といった、後世に残る大きな建造物を残した人たちとは違い、北欧人は貨幣、武器、工芸品、船墓、居住の跡地などの生活に密着した物質のみをイングランドの地に残していった。これは、イングランド人に提供すべき際立った物質文化があまりなかったことを物語っている。しかし、彼らは具体的に目に見ることのできないものである法律や舟に関する知識・技術などに長けている文化を持っていたことは、英語に数多く残っている借用語から推測できるのである。その中で、国の経済的発展を考える上で特に重要なのが後者の方で、彼らの持つ高度な造船技術と船舶技術を駆使して貿易等の商業活動を行うことで、イングランドにおける都市の発展に大きく貢献したのであった。

10世紀と11世紀は、国の至る所で、貿易市場は数と規模の両方において著しく増加した

が、最も大きくそして最も富んだもののほとんどが北部と東部にあった。デーノロー地域の重要な港などは、軍隊の統治下のもと十分に防備されていたので、ますます栄え貿易中心地として発展していった。その中で群を抜いていたのがヨークで、北欧王国の都として繁栄し、954年にイングランド王に降伏してもそれまで通りの勢いであった⁴⁰⁾。それに負けないほど大きな中心都市に発展していったのがリンカーンである。この2大都市は、それを中心に建立されたデーノロー地域の最大州であるヨークシャーとリンカーンシャーの行政の中心になっただけではなく、ロンドンに次ぐ大きな造幣局がある貨幣製造の中心でもあった。そのほかヴァイキングの軍事要砦のあったノッティンガム、ダービー、レスター、スタッフォードもそれぞれを中心にして建てられた州の行政の中心地になった。デーノロー地域南部は、10世紀後期にはピーターバラ（ケンブリッジシャー）、イーリー（ケンブリッジシャー）、ペリーセントエドマンズ（サフォーク）が重要な町になり、セットフォード（ノーフォーク）、ケンブリッジ（ケンブリッジシャー）、ノリッジ（ノーフォーク）もまた、スカンジナビア人の存在が直接の理由で都市に発展していったのである。

おわりに

デーノロー地域の社会的状況は欧米では近年活発に論じられ、それまでの歴史観から脱却した新たな体系的な枠組みで再構築されつつある。当たり前であるが、それを行うには言語学的視点のみならず、歴史学、考古学、人類学などの様々な学問領域をも包含し、それだけで不十分な所は、現代の研究分野をベースにして推定することで初めてなされるものである。その必要性において言語学者が再認識しなければならないことは、言語は文化のひとつであるということである。そうであるから通時的言語変化の過程を探求する際には、言語自体の内的要因と言語を取り巻く外的要因のふたつを考慮することが不可欠である。そのように考えることによって、北欧語の英語への影響を述べる際には、北欧語からの借用語のみを並べて記述することよりも、何故、どのような要因でそうなったのかを言語的に、社会的に、複雑に絡み合っている事象を解明して行くことによって、言語の普遍性を探求することが可能なのである。

注

- 1) Gerry Knowles, *A Cultural History of the English Language*, London, Arnold, 1997 (小野茂、小野恭子訳『文化史的に見た英語史』開文社、1990年、43頁)。
- 2) Eliert Ekwall, 'The Scandinavian Settlement', in H. C. Darby (ed.) *An Historical Geography of England before A.D. 1800* (Chapter IV), Cambridge, CUP, 1936, p.134.
- 3) Eliert Ekwall, *op. cit.*, p.144.
- 4) Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, re. edn., Oxford, OUP, 1984, p.421.
- 5) Niels Lund, 'The Settlers: Where Do We Get Them From - And Do We Need Them?' in Hans Bekker-Nielsen, Peter Foote & Olaf Olsen (eds.) *Proceedings of the Eight Viking Congress*, Odense, Odense University Press, 1981, pp.147-171.
- 6) ヨークシャー以外には、リンゼー（リンカンシャーにある旧行政区分）もかつてはリディングに三分割されていた。
- 7) Johannes Brøndsted, *The Vikings*, rep., London, Penguin Books, 1967, p.260.
- 8) Gwyn Jones, *op. cit.*, p.422.
- 9) Johannes Brøndsted, *op. cit.*, p.260.

- 10) Gwyn Jones, *op. cit.*, p.422.
- 11) Eliert Ekwall, 'How Long did the Scandinavian Language Survive in England?', in *A Grammatical Miscellany Offered to Otto Jespersen on his Seventieth Birthday*, London, George Allen & Unwin Ltd., 1930, p.2.
- 12) Erik Björkman, *Scandinavian Loan-Words in Middle English*, rep., New York, Green-wood Press, 1969, p.274.
- 13) Erik Björkman, *op. cit.*, p.276.
- 14) Gillian Fellows-Jensen, 'The Vikings in England: a review', in Peter Clemoes (ed.) *Anglo-Saxon England*, Cambridge, CUP, 1975, p.204, quoted from A. L. Binns, *The Viking Century in East Yorkshire*, East Yorkshire Local Hist. Ser.15, 1963, p.24.
- 15) John Geipel, *The Viking Legacy*, New Abbot, David and Charles, 1971, p.52.
- 16) G. N. Garmonsway, *The Anglo-Saxon Chronicle*, London, Everyman, 1994, p.115.
- 17) Friedrich Kluge, 'Old English Letter', in *Englische Studien* viii, p.62.
- 18) Otto Jespersen, *Growth and Structure of The English Language*, 9th ed., London, Basil Blackwell, 1956, p.62.
- 19) Erik Björkman, *op. cit.*, p.276.
- 20) これらの神々の名前は、それぞれ曜日のWednesday, Thursday, Tuesday, Fridayという名称にその名残を残している。
- 21) Dorothy Whitelock, 'The Conversion of the Eastern Danelaw', *Saga Book of the Viking Society*, xii, 1935-1945, pp.159-176.
- 22) Frédéric Durand, *Les Vikings*, Paris, Presses Universitaires de France, 1965 (久野浩、目置雅子訳『バイキング』文庫クセジュ、白水社、1980年、136頁)。
- 23) 山室静『サガとエッダの世界—アイスランドの歴史と文化』現代教養文庫、社会思想社、1992年、91頁。
- 24) 山室静, *op.cit.*, p.167.
- 25) 阿部謹也『ヨーロッパ中世の宇宙観』講談社学術文庫、1991年、194頁-205頁。
- 26) 阿部謹也, *op. cit.*, pp. 194-205.
- 27) Dorothy Whitelock, *The Beginnings of English Society*, Harmondsworth, Eng., Penguin Books, 1952, pp.110-111.
- 28) Dorothy Whitelock, *op. cit.*, p.110.
- 29) L. M. Myers & Richard L. Hoffman, *The Roots of Modern English*, 2nd ed., 1979, London, Little, Brown and Company, ed. with notes by Haruo Iwakaki, Kinseido, 1980, p.69.
- 30) L. M. Myers & Richard L. Hoffman, *op. cit.*, pp.68-69.
- 31) Peter H. Sawyer, *The Age of the Vikings*, 2nd ed., London, Edward Arnold, 1971, p.150.
- 32) 山室静, *op. cit.*, p.39.
- 33) Peter H. Sawyer, *op. cit.*, pp.124-125.
- 34) Foster M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, 3rd ed., London, The Clarendon Press, 1971, p.241.
- 35) 北欧人の入植者数に関する様々な見解はGwyn Jones (*op. cit.*, p. 218), Niels Lund (*op. cit.*, p.147), F. T. Wainwright (*Archaeology and Place-Names and History - An Essay on Problems of Co-ordination*, London, Routledge & Kegan Paul, 1962, p.82), R. H. C. Davis ('East Anglia and the Danelaw', *Transactions of the Royal Historical Society* 5th ser.5, pp. 23-39, 1955, p.32), Bente Hyldegaard Hansen ('The Historical Implications of the Scandinavian Linguistic Element in English', *North-Western European Language Evolution* 4, pp.53-79, 1984, p.79), そして Dieter Kastovsky ('Chapter 5 Semantics and Vocabulary' in Richard M. Hogg (ed.) *The Cambridge History of the English Language Vol. 1 The Beginnings to 1066*, Cambridge, CUP, 1992, p.323) でなされている。
- 36) しかしF. M. Stenton (*op. cit.*, p.513) はその可能性を支持している。
- 37) Arthur Paistrick, *West Riding Yorkshire*, York, Hodder and Stoughton, 1970, p.37.

38) Arthur Paistrick, *op. cit.*, pp.32-33.

39) Henry Loyn, *The Vikings in Britain*, Cambridge, Mass., Blackwell, 1995, p.49.

40) Peter H. Sawyer, *op. cit.*, p.197.

キーワード：英語史 言語変化 北欧語の影響 デーンロー地域

(YOKOTA Yumi)

Non-homogeneous Social Nature of the Danelaw Area: From the Perspective of Historical Linguistics

Yumi YOKOTA

Abstract

Danes were officially allowed to settle down in the northern land of the English people after the Edmore treaty signed by the then English king Alfred the Great and the leader of the Viking invaders Guthrum in 886. The area was later called the Danelaw area, which eventually gave birth to a unique society mixed with traditional English and Scandinavian customs. This Anglo-Scandinavian society was, from the eyes of the southern English people, very different from their own. Nonetheless, the Danelaw area was far from homogenous in terms of social natures and systems, religions and speech due to varying degrees of cultural intermingling and the number of new settlers. For historical linguists, one of whose tenets being to explain how languages change, it is important to understand the importance of the historical social atmosphere in inducing the process of language change which would make the English language totally different from what it would have been otherwise.